

## 自然と運命

長澤信壽

此處に「自然と運命」といふ論題を掲げたのであるが、私が今述べようとするのは、廣い範圍に亘る「自然と運命」に就いてではなく、古代ギリシアの精神史に於ける自然と運命に就いてである。

ギリシア古代の詩人ヘーシオドス(Hesiodos)はかう云つてゐる、「我等多くの偽りごとをまことしやかに語る術を知る。されど若し我等望まば眞實をも語ることを知る」。(Theogonia 神統記)と。この「偽りをまことしやかに語る」とは嘘を眞實として語るといふのではなくて、實はミュトス的に語ることである。又「眞のことを語る」とはミュトス的にでなくてロゴス的に語るのである。即ち同じことをミュトス的に語ることも出来るし、又ロゴス的に語ることも可能である。これがギリシア精神史を支配した考方の二つの道であつた。ところでミュトス的に考へることによつて運命が問題となり、ロゴス的に考へることによつて自然が問題となる。

先づギリシアの宗教を中心とする精神文化の起源について述べて見よう。我々はその起源を三つ

に分つことが出来るであらう。第一はミケケーナエ (Mycenae) の文化である。これは今日發掘によつて僅かに知られてゐるに過ぎないが、ギリシアの國民的宗教は、その影響を受け、乃至それと同一系統の文化に屬すると見てよいであらう。オリュムポスの宗教が即ちそれである。これがホメロス及びヘーシオドスによつて組織立てられたことは、歴史の父ヘーロドトスが言つてゐる通りである。この宗教は抒情詩人、悲劇詩人を通つて發達した。運命論がその中心の課題となつてゐたのであつて、神義論（プロダイキ）の問題も運命論の問題から考へらるべきものであらうと思ふ。

第二はトラキアに起源を有するものである。これは最初から神秘的な傾向を有する解脱の宗教を説いた運動であつた。即ちそれはディオニシオスの宗教を中心とするオルベウス教である。之に對して論理的な意味を與へたものがピユータゴラス派であり、其を承繼して哲學的根據を與へたものがソークラテース及びプラトーンである。第一の流れがミュトスの運命論を中心としてゐたに對して、第二のそれは靈魂の不死を中心としたものであり、之は神秘的であり、エルゴンの即ち行爲的、實踐的である。

第三はイオニアに起つた哲學、所謂ミレトス學派である。Thales を以て哲學の父とするのは哲學を學ぶ者の常識となつてゐる。ギリシア哲學は自然存在の哲學であると云はれてゐるし、ギリシアの哲學を自然存在の哲學として特徴づけることは大體に於て正しい。然し成程自然存在の哲學で

はあるが、長い間の哲學の發展を見ると、嚴密な意味での自然存在が問題になつたのは紀元前四世紀、ソフィスト時代以前であつてソークラテース頃には問題が人間中心に移つてゐた。ギリシア哲學は自然を中心とした時代、人間を中心とした時代、宗教を中心とした時代の三期に分つことが出来る。この様にギリシア文化を概觀することが出来る。

こゝにあげたギリシアの精神文化の三つの起源の第一は文學の形態、第二は宗教の形態、第三は哲學の形態をとつて發展した。而して第三は他の國に於てもさうであるやうに、比較的遅れて發展した。ところでこの三つの流はソークラテース、プラトーンに至つて統一された。プラトーンは此の三つの觀點から眺めたが故に、對話篇は Mythos 的 ergon 的 Logos 的の三つの面を含んでゐるのである。先づこの様に見ることが出来る。

處でパスカル (Pascal) は「人間は考へる蘆である」と云つてゐる。然しパスカルは人間がどういふ風に考へるかを云はなかつた。確に人間の著しい特徴は思惟することである。然し思惟する仕方は一樣でない。我々は考へると云へば Logos 的に概念を用ひて考へる様に解し易い。然し我々は Logos 的に概念を用ひて考へるとは限らない。同じ値をもつたものを<sup>2</sup>とも、abとも、或は幾何學の如く、圖形で以て考へることも出来る様に、第三の流が概念を用ひて Logos 的に考へたに對し、第一は概念を用ひず、かへつて一つの姿として、具體的な形態で以て考へるのである。ギリシ

ア語では *logos* も *muthos* も本來は「言葉」といふ意味である。此が發展して、一方が概念的抽象的な考へ方に發展したに對して、他は具體的形態的思惟に發展した。ギリシア人のとらへた思惟の内容は同じであるが、それを概念的に抽象的に思惟したものが自然となり、形態的、具體的に考へたものが運命となつた。今簡単にギリシアの運命觀の發展につき語ることにする。

歴史家の父と云はれたヘーロドトスは「ホメーロスとヘーシオドスとはギリシア人の爲に、その神々を創り出し、彼等に名を與へ、彼等に役目を與へ、而して彼等を描き出した」と云つてゐる。この言葉はホメーロスやヘーシオドスが所謂ギリシアの神々が各地方に散在してゐたものを、

Olympos の山を中心として國民的宗教となしたことを意味する。Homeros の神觀を支配してゐたものは擬人論である。彼の描いた神々はことごとく人間的であつた。餘りに人間的であつた。人間の様に意志感情をもち、人間以上に奸智にたけ、而も嫉妬深くあつた。只不死である事を除いては殆んど人間と神々との相違はなかつたのである。神々は人間より我儘である。そして人間はこの神々の意志に逆くことが出来ぬ。この神々の意志が人間にとつて運命となつて表れた。神々の意志は人間の力では如何とも出来ない、神々の中の父なるゼエウスの意志は運命であるが、時としては、ゼエウスそのものも運命に服さねばならなかつた。

「運命」のことをギリシア語では *moira*, *heimarmenē* とする。(Moira, Heimarmenē とすると神の

名となるのであるが)、Homerosは「すべての人間は神を必要とする。」と歌つてゐる。Homerosの次に出た Hesiodos は單に人間のみでなく自然の事物もその根底には神をもつてゐるものと認めた、そして Homeros に於ては系統が明瞭でなかつたのであるが、Hesiodos は一歩進めて、その間に出生、結婚等々の關係を定め、かくして、神々の系譜を作つた。また神々の御代が、黄金時代、銀の時代、青銅の時代、英雄の時代、鐵の時代と變遷すると語つた。之が彼の神統記に於ける説明である。

神は最初混沌 (Khaos) があり、次に土地 (Gaia) 次に愛 (Eros) と斯くの如く神々が發生したのである。Hesiodos は詩人であつたばかりでなく、哲學者でもあり同時に一種の歴史觀を持ち、進んだ倫理觀を持つてゐた。斯くして後の Milesos 學派の人々が概念的、抽象的に爲したものを、Homeros, Hesiodos は具體的・ミユトス的に考へた。それは一切の現象のアルケーを尋ねる事である。アルケーとは一切の現象の初めであると共に原理であるものを言ふ。この原理から雜多なる現象が生じるのである。一から多が如何にして生じたか。之を Homeros, Hesiodos は Mythos 的に考へた。かく Homeros Hesiodos は神話的表象に依り世界を考へたが故に、logos 的に考へたならば容易に解決出来なかつた問題をも容易に解くことが出来たのである。然し更に反省するとホメーロスやヘーシオドスが豫想だにしなかつた困難がある。Homeros よりも Hesiodos の方が一層明瞭に事

物の根柢に神を認め、且つ *Chaos* から萬物の發生する過程を説明したが、これは神話的表象による一種の世界觀である。ギリシア哲學も一つの世界觀と見る事が出来、其處に於ては存在と生成とが問題になつた。神話もそれと同じ問題を取扱ひ、ミュトス的に解決した。ギリシア神話のうちには宗教的儀禮を説明し解釋したのも認められるが、その根柢には、自然存在の解決が潜んでゐる。

「誰がこの世界を創つたか」と問ふ事によつて神話となり、何がと問ふ事によつて哲學が生ずる。誰がの問題は、ヘトシオドスの場合にはつきり認められるやうに原因を遡り、*Chaos* に達する。

然し何がの問題は事物の原理、基礎を尋ねる。*Muthos* 的な考へ方は系譜的に遡るが、*Logos* 的な考へ方は最初から存在の基礎を尋ねることとなる。

ギリシアの哲學的思索の始は神話的な表象の否定であると言はれてゐる。タレースは神話的な表象をからずに自然を説明した。哲學は神話的表象を否定して問題を思惟に委ねた。しかしミュトス的に考へる事は人間性の奥深くに巢をくつてゐるものであつて、いくら思惟によつて否定しても反つて思惟の中に含まれるのである。世界解釋や人生觀のロゴス的性格とミュトス的性格とは、一方を否定したからとて失はるゝものでなく、互にからみ合つてゐるのである。このことはアルケーを水となしたことによつて、始めて、哲學を神話的表象から解放したと言はれてゐるタレースが、「萬物は神々に満てり」と言つたことによつても推察せられるが、更にギリシア主知主義の完成者とし

て特徴づけられるソークラテース・プラトーンに於て、我々はその典型的例證を見るのである。Homeros と Hesiodos はその後の精神文化に及ぼせる影響は大であつた。ギリシア思想發展の著しい特色は傳承に對して批判的なことであつた。其處に新しいものを生み出し取り出した。かゝる批判の動機となつたものはギリシア人の道德的な反省である。何が道德的な反省をうながしたかと云へば、それは紀元前六、七世紀に於けるギリシア人の經濟的な發展である。此の時代、ギリシア民族は殖民地を開發して經濟生活が豊になつたので、以前の純朴を離れ華美に流るゝに至つた。元來ギリシア人は「ポリス」、(都市國家)の中で、ポリスを中心として生活してゐた。所が生活が豊になり貧富の差がひどくなるに従つて、個人を中心として物を考へるやうになつた。經濟生活の膨脹は一方には普遍的、他方には個人的の覺醒をうながした。之は反するやうであるが個人的に自覺する事は普遍的に自覺する事である。此所に於て普遍と個人とは結び附く。ポリスを中心に生活してゐたギリシア人が個人的にして普遍的に物を考へる様になつた。即ち經濟思想の發展は個人主義の思想を發展せしめた。かくして傳統的な神經表象の基礎となつてゐたところの神話的表象に對する批判となり、更に進んで、傳承的神話の觀念を、改めるに至つた。かくポリス的な考へ方をしてゐたものがポリスから離れて、生活し普遍的に物を考へるに至ると、民族を中心として歌つた叙事詩が抒情詩となるに至つた。之は個人意識の發展によつて生ずるものである。即ち個人自身の心情を歌

ふ抒情詩 (Lyric) が生れて來たのである。紀元前六、七世紀の頃の抒情詩人を見るに二通りある。一は享樂的な嘆美的な傾向を代表するもの、即ちサップオー、ミムネルモス、アナクレオン等それであり、他の一は道徳的な反省の強い詩人、即ち箴言詩人 Gnomie Poets である。これらの傾向は全く反對であるが、其所に共通した特徴がある、それは厭世的な人生觀である。

かゝる厭世的な傾向は Homeros 以來ギリシア人の持つてゐた運命的人生觀に基くものである。Homeros に於ては人間の運命は Zeus の自由意志又は恣意によると見られるが、個人意識が強くなるに伴ひ、かゝる運命觀が強くなつた。神は全能であり「人間は神に對して暴慢を抑制せよ」「人間の分を越ゆるな」。「お前はお前の身の程を知れ」と歌つたのである。

更に Theogonia は「人の子にとつては生れないこと、烈しい日の光を見ぬ事が何事よりも望ましい。生れたならば成る可く早くハデスの門を過ぎて厚い大地の衣のもとに横たはるにしくはなし」と云つてゐる。かゝる深い厭世的な運命觀を見る。ピンダロスは Ode の中で人は何であるかに答へて「人間は影の夢である」と云つた。又「人間は神と同一の Gaia (地) から生れたものであるが、然も分れて人間は無であり、神は Olympus に永久に止まる」と歌つてゐる。此の詩は宗教的なもので其の宗教的に高められた Pindaros の運命觀は「Zeus の如くあらうと願ふな、はかなき者は、はかなき事こそふさはしけれ」と歌ふ。彼はもはや傳承的な神の概念に満足出來ずに、神話に

於ける醜い行ひを、神話から、取り去らうとした。そして「神々に關しては美しきことのみを歌ふところ人間にふさはしけれ」とする。此の傾向を承け繼いだものがギリシア悲劇である。ギリシア悲劇の基礎になつてゐたものは、厭世的な人生觀であつて、神議論と運命論とが、その動機となつてゐた。然しその中でも、深い根柢にあるものは、運命論である。神議論は運命の問題から引きはなすことは、出来ないもので、運命の問題に關して起つたものである。此處に注意しておきたい事がある。ギリシアに於ては、運命が人間の力によつては、動かし得ないこと、そして人間のみならず神々の父たる *Zeus* と雖もこの運命の支配を免れ得ないことである。次に運命がギリシアの悲劇の中心問題となつたことは、結局運命に支配せられない自由の可能が、自覺せられたと云ふ事である。否自由の可能と言ふよりも、自由の可能に對する要求が自覺されたと云ふ事である。

此の自由の自覺の源は經濟的發展に伴ふ個人意識の覺醒にうながされたのである。自由と道德とは互に相伴ふものであるが、然し自由と運命とは相容れないものである。人間の精神史上に於て最も早く自由を自覺し自由を尊重し、自由を求めたものは、ギリシア人であつたが、而もこのギリシア人は最も早く、且つ深く人間の意志によつては動かし得ない運命を自覺した民族である。

何故に運命は悲劇の中心問題となつたか。Homeros にあつては、自由は有つても、自由に對する要求の自覺はなかつた。運命は單に直接的には即ち、即自態としては吾々の關心の對象とはなり

得ない。自由と對立せしめられて始めて始めて運命は問題となる。故に運命の問題は一面自由の問題となる。運命は自由を媒介として始めて問題となり、問題として自覺せらるゝと言ふ事が出来る。此は悲劇詩人時代に、はつきりと意識せられた。運命が悲劇の中心となつた理由も此所にあつたのである。

ところで此の運命の問題は *mythos* 的性格をもつてゐる。運命はミユトスの形態を以て考へられる。これが運命が個人の一生と云ふ形で考へられる所以である。我々は同じ運命を二つ考へる事は出来ない。そこには無限の差異がある。人間の個性は運命によりて始めて作られる。運命は *mythos* 的性格に於て考へられたものであるが、之が *logos* 的に考へられたとしたらどうなるか、それは自然 (*Physis*) である。故に我々の見る所では自然の問題も悲劇詩人の問題も考へ方を異にして考へたに過ぎない。

運命とはギリシア語では *moira*, *heimarmene* と云ふが、本來の意味は「部分」であつて分たれた部分、各自が有する部分である。各人の部分が、各人の運命である。では一體何を分たれて、各人はうちにもつてゐるのか。各人は何の部分をもつのか。其の分たれたものは、自然である。自然が各人に分たれたものである。各人が持つ自然の部分が各人の運命である。ギリシア人は人間の中にあるものを *Physis* と云はず *moira* と云つたのである。同じものが對象的に我の外にあると見

られた時に Physis と云ひそれが我々の内にあり、主體的にあると考へた時に moira と云つたのである。かく同じものが基體的に考へられることによつて Physis となり、主體として考へられる時に moira となつた。かくの如き運命と自然とは同じものであるが、各人は部分を持つことなしに生き得ない。人間は moira を持たずに生き得ない。又人間は自然の一部分なる故に、自然を持たずに生き得ない。而も人間は自然を持つことによりて生きるが、またそれを持つことによつて滅びるのである、故に人間は運命を持たずに存在し得ず又持つ事によりて滅亡するのである。

次に運命は自由と對立せしめられる事によりて始めて、自覺されるが、同様に存在も生成と對立せしめられて、始めて我々の自覺に持ち來されると云ひ得る。始めて存在が生成と對立せしめられて、自覺に持ち來されたものが Elea 派 Parmenides の哲學である。此れ以前の哲學も存在の哲學には違ひないが、存在的であつて、存在論的ではなかつた。存在的とは、存在を自然物（水火四原素等）に移して考へるものであり、それに反して存在論的とは、存在を存在そのものとして考へるのである。ギリシア存在論の發展の歴史は、存在的から存在論的への自覺である。存在を存在として考へるとは、存在を非存在に對立せしめて考へる事である。生成は非存在である。存在論的自覺に於て始めて存在は非存在と對立せしめられたのである。Elea 派のパルメニテースは存在を非存在に對立せしめ、存在の側から見て、存在を説いた。それに反して、存在と非存在とを對立させは

したが、非存在の立場から見たのが Herakleitos である。Herakleitos は「凡てのものは流れる」と言つたと言はれてゐる。此は彼の考へ方をよく表はしてゐる。此の考への根柢には、對立するものゝ一方が他方に至ると云ふ思想がある。一樣なるものゝ世界に於ては生成はない。Parmenides には生成がない、生成と對立の過程を Herakleitos は鬭争と言つてゐる。「戰は萬物の父であり、萬物の王である」とも言ひ、「萬物は争によつて生ず」とも言つてゐる。「すべてのものは對立しては生成し、對立して生成する」のである。かくして對立と生成によつて差別の世界が生じる。生成變化して止まないにも拘はらず、現實の世界はある。何とならば生成の間にもハルモニア(調和)があるから、凡てのものは生成變化するが、生成變化する事その事は不變である。換言すれば其所には、不變なる法則性がある。其所に調和が生ずる。ヘーラクレイトスはその法則性を Logos と呼んだ。吾々が眞理と名付け得るものは Logos のみであると云ふ。「我に聽くに非ず Logos に聽いて凡てのものが一である事を知るものこそ智者である。」彼はこのロゴスのことを「萬物に共通なるもの」とも言ひ、また「必然」、「運命」とも稱し、時には「神」とも呼んでゐる。プラトーンの哲學の立場は一面はヘーラクレイトス、一面はバルメニデースである。プラトーンのアイデアの世界に對立する現實の世界を不斷に流動してやまない生成の世界であるとなしたことも主としてヘーラクレイトスの影響であつた。ヘーラクレイトスの Logos の考へはピロオンを通りキリスト教に入り、キ

リスト教神學に受け入れられたことは周知の通りである。

mythos と logos の立場を統一したものが ergon の立場である。これがピユータゴラス派の立場である。ソークラテースの哲學はピユータゴラス派の哲學の出でない。即ち行爲の立場をとつてゐた。此等を統一發展せしめたのがプラトーンの哲學である。